

フィンランドの教育の特徴について

土平 健雄

The characteristics of Education in Finland

Takeo Tsuchihira

キーワード：学力 academic achievement、PISA、読解力 reading comprehension、
フィンランド Finland

はじめに

ここ10年ほど子どもたちの学力低下を新聞やテレビなどが大きく取り上げ、社会問題となったが、昨年3月に新しい学習指導要領および授業時数の増加の方針が公表されるに及んで、その喧騒も鎮静化しつつある。

「ゆとり教育」の象徴とされた「総合的な学習の時間」を削減し、旧来の教科学習に費やす時間を増やして一件落着きというような見方が世間では一般的だと思われるが、そこには何か見落としはないのであろうか。

小論では、学力低下、ゆとり教育の見直し、世界一といわれるフィンランドの教育などを取り上げ、考察したい。

1. 低学力批判と教育行政の方針転換

今からちょうど10年前の1999年、現行の学習指導要領が公示された。ほぼ同時に、「低学力」批判、「ゆとり」教育批判が始まった。『分数のできない大学生』『小数のできない大学生』など、センセーショナルな題名の書物が出版され、マスコミも騒いだ。

現行の学習指導要領は2002年度の完全実施直前に修正を余儀なくされるという異例の事態に遭遇した。

2002年1月17日、遠山文部科学大臣は、「学びのすすめ」という緊急アピールを出した。その内容は、よくできる子には、学習指導要領の

内容のみにとどまらず、発展的学習に取り組みせ、さらに力を伸ばしていく。できない子には、放課後などに補習をしたり、宿題も出す、というものだった。

2004年10月、就任したばかりの中山文部科学大臣が、テスト結果を公表して子どもたちの競争意識を高めたらどうかと発言した。11月には、中央教育審議会と小泉首相に全国学力テストの実施を盛り込んだ義務教育改革私案を提示した。

2004年12月7日、OECD（経済協力開発機構）の「生徒の学習到達度調査」(PISA2003)の結果が発表された。マスコミは「日本の学力、世界トップの座から落ちる」、ゆとり教育のつけがまわってきた、と大々的に報道した。

同年12月15日、IEA（国際教育到達度評価学会）の「国際数学・理科教育動向調査」

(TIMSS2003)の結果も発表された。同じくマスコミは日本の成績は前回を下回った、と報道したが、PISAに比べて扱いは小さかった。

年が明けて2005年1月、中山文部科学大臣は、ついに「総合的な学習の時間」を削減すると発言した。さらに2月には、文部科学省審議官の「生活科」見直し発言も報道された。

こうして教科の授業時間を増やそうとする動きが強まった。

文部科学省は、PISA2003で低下した読解力を向上させるため、学校に一斉読書を奨励した。

学校では教科の授業時数が増やされ、習熟度別授業が普及し、地域によっては学力テストを

実施し、その点数を参考に学校選択が可能になった。

そしてついに2007年4月、全国学力テスト(全国学力・学習状況調査)が約40年ぶりに復活した。

2. PISA 2003とTIMSS2003 の概要

ところで、同じ国際学力テストといってもPISAとTIMSSはかなり性格が違う。

まず、PISA 2003の概要を以下に示す。

- 1) 実施主体：経済協力開発機構(OECD)
1960年設立の政府間機関、30カ国より構成
- 2) 参加国：41カ国・地域(OECD加盟30カ国＋非加盟11カ国・地域)
- 3) 調査時期：2003年7月
- 4) 調査対象：高校1年生 約4700人
- 5) 調査項目：読解力、数学的リテラシー、科学的リテラシー、問題解決能力(2003年調査から)
- 6) 調査内容：知識や技能等を実生活の様々な場面で直面する課題にどの程度活用できるかを評価(記述式が中心)

次に、TIMSS 2003の概要を示す。

- 1) 実施主体：国際教育到達度評価学会(IEA)
1960年設立の国際学術研究団体、60カ国・地域の教育研究機関より構成
- 2) 参加国：小学校4年生は25カ国・地域、中学校2年生は46カ国・地域
- 3) 調査時期：2003年2月
- 4) 調査対象：小4 約4500人、中2 約4900人
- 5) 調査項目：算数・数学、理科
- 6) 調査内容：学校のカリキュラムで学んだ知識や技能等がどの程度習得されているかを評価(選択肢が中心)

つまり、TIMSSは日本人に馴染みのある従来型の学力テストであるのに対し、PISAは全く新しい学力概念で測られるテストである。

ところで、PISA2003で日本の順位はどうだったのだろうか。

- 1) 数学的リテラシー
6位(前回のPISA2000では1位)
- 2) 読解力

14位 OECD平均と同程度(前回8位)

- 3) 科学的リテラシー
2位(前回2位)
- 4) 問題解決能力 4位(今回からは、PISA2003で上位の国はどうか。)
- 1) 数学的リテラシー
①香港 ②フィンランド ③韓国 ④オランダ
- 2) 読解力
①フィンランド ②韓国 ③カナダ ④オーストラリア
- 3) 科学的リテラシー
①フィンランド ②日本 ③香港 ④韓国
- 4) 問題解決能力
①韓国 ②香港 ③フィンランド ④日本
いずれにおいてもフィンランドの好成績が目を見届げる。

3. フィンランド教育省の公式見解

一躍世界中から注目を浴びることになったフィンランドの教育省は、世界一になった理由を以下のような公式見解として示している。

1. 家庭、性、経済状態、母語に関係なく、教育への機会が平等であること。
2. どの地域でも教育へのアクセスが可能であること。
3. 性による分離を否定していること。
4. 全ての教育を無償にしていること。
5. 総合制で、選別をしない基礎教育。
6. 全体は中央で調整されるが実行は地域でなされるというように、教育行政が支援の立場に立ち、柔軟であること。
7. 全ての教育段階で互いに影響し合い協同する活動を行うこと。仲間意識という考え。
8. 生徒の学習と福祉に対し個人に合った支援をすること。
9. テストと序列付けをなくし、発達の視点に立った生徒評価をすること。
10. 高い専門性をもち、自分の考えで行動する教師。

11. 社会構成主義的な学習概念。

さらにフィンランドの6・3制基礎学校の特色として、次のような点が挙げられている。

おちこぼれを防ぐあらゆる手立てがある。例えば、基礎学力が十分ついていないと思われる者は、自らあるいは教師の助言で、更に1年間履修することができる10学年が設置されている。人から落第生などと言われることなく、むしろよく勉強したと評価される。

グループ学習、少人数学習、個別指導、公民教育、環境教育が徹底されている。

いずれも意義のある説明であるが、いまひとつ納得がいかない。つまり、実際にどのような教育が行われているのかという点である。これを探るため多くの日本人がフィンランドに取材に押しかけ、多くの報告書が出版された。

研究者やジャーナリストの書いたものに混じって、ある高校生がフィンランドの高校に留学した体験記が目にとまった。体験者ならではの視点で、フィンランドの教育の特色をよく伝えている。

4. ある留学生の体験記より

実川真由さんが留学したヘルトニエミ高校は、ヘルシンキ市内にある中高一貫の公立学校である。中高一貫校はフィンランドでは珍しくなく、小中高一貫校もある。中学校までは義務教育、高校は義務ではない。全校生徒は約640人。中学生は約370人・高校生は約270人。

クラス数は、中学ではA～Eまでであり、人数も15～30人。高校では、A～Cまでであり、25～30人。

彼女は、この学校の高校2年に編入した。彼女の紹介によれば、フィンランドの高校のシステムは、以下のような特色をもつ。

フィンランドの高校のシステムは日本の大学とよく似ている。まず学期のはじめに、ホームルームの先生の指示に従って、1年間の授業を選択する。

フィンランドの高校は、3年間の取得単位数によって卒業試験を受けられるかどうか、つまり卒業できるかどうかが決まる。学校によって

卒業に必要な単位数は違うが、ヘルトニエミ高校は72単位が必要だった。全科目が自由選択なので、自分のレベルに合わせて授業をとることができる。

8時から授業が始まる生徒もいれば、お昼から登校する生徒もいる。

高校3年生になると単位をほとんど取得してしまっているのので、1週間に2回程度しか登校しなくなる。

そして、フィンランドの授業の形式について、次のように紹介している。

科目ごとに毎回、教室を移動する。休み時間は、教室には鍵がかけられていて、先生はいない。

授業と授業の間の休みは10分あるので、みんな廊下へ出て、おしゃべりをしたりする。

授業開始のベルが鳴ると、職員室から先生が来て、鍵を開けてくれる。みんな好きなところに着席し、出席をとったら授業開始という流れだ。

大幅に遅刻してくる先生はおらず、大抵は時間通りに教室の鍵は開いた。

さらに、テストについては、次のように語っている。

ヘルトニエミ高校は5学期制で、5回テストウィークがある。テスト期間は約2週間も続く。

テスト期間前にだいたい授業が終わり、各授業でテストの時間帯と範囲が発表される。ときには授業の時間内でテストをする科目もある。

ところで、テストの前は普通何をするだろうか。勉強、である。

ところが、フィンランドでは「勉強する」という単語を使わない。代わりに「読む」という単語を使う。お母さんは息子に、「明日テストでしょ。たくさん読みなさい」と言い、生徒同士では、「もうすぐテストだね、たくさん読んでも？」といった会話が飛び交う。

「読む」。実はこれがフィンランドの教育のキーワードであることに彼女は気付いた。

フィンランドでは、テスト前になると、友達が分厚い本を抱えて、ロッカーの前を行ったり来たりしているので、「なんか課題出されたの？」と尋ねると、「今日の授業はテストがあ

るから、読まなきゃいけないの」と言う。

テスト前はいつも疑問に思っていたが、その疑問はすぐに解消された。フィンランドのテストはほとんどがエッセイ（作文）なのだ。

英語、国語はもちろん、化学、生物、音楽までも、自分の考えを文章にして書かせるのがフィンランドの高校の一般的なテスト形式である。

フィンランドでは日本のような穴埋め問題というものがそもそもない。全て記述式なのである。

以上で納得できるように、フィンランドではテストそのものが日本とは違う形式なのである。

PISAの問題を見ると分かるが、決して記憶や暗記に頼るものではない。

読解力を測定する問題で、有名な「落書きに関する問題」がある。日本の多くの生徒が手をつけずに残したといわれる問題である。

その解答および採点基準は、以下のようである。
問2 落書きと広告を同列視（もしくは比較）することで、落書きを擁護しようという手段に使っている。

問3 採点基準は、課題文の引用だけでなく、内容に触れながら説得力ある解釈をしていること。

問4 採点基準は、手紙の文体、議論の組み立て、議論の説得力、論調、使用している用語、読み手に訴える特徴などを説明してどちらがよいかを判断していること。どちらを支持していてもよい。

PISAの問題にひとつの正解はない。各自がどう読み取り、どう考えたか、を問うている。これはわが国の教育ではなかなか身につかない能力である。

では、フィンランドでは、読解力をつけるためにどのような授業が行われているのだろうか。

5. 読解力をつける方法

ここで、真由さんが好きだったエヴェ先生の授業の特徴を紹介しておきたい。

エヴェの授業の特徴は、自身がリストアップしたおすすめの本リスト（映画やドラマも含む）を生徒に配り、好きなものをとにかく読ま

せることにある。

生徒に書かせる量も半端ではないが、読ませる量も半端ではない。

そして、プレゼンテーションをさせる。それを授業中に全員で聞いて、それぞれの作品を生徒同士で評価することもある。「フィンランド人は、読解力はあるけど、話すのは苦手。だからどンドン喋らせるの」とエヴェ先生は答えている。

「そんなに多くの宿題をだして、みんなできるんですか？」と母が聞くと、「そうね～、だいたい生徒はやりますよ。そういう課題をやらぬ生徒は、何をやらせてもやらぬから、留年します」と、キッパリ答えたという。

フィンランドの生徒が読解力において世界一であるのは、このような日々の授業の成果であろう。

以上は、高校での体験談だが、小学校でも事情は同じようである。

「小学3年生担任のミッコ・アウティオ先生は、『国語なら読み書きの正確さより、読んだ文章について考え、感想や意見をどう表現するかに重点をおく』と言っている。」¹

6. 読書指導の重要性

さらに、学校や家庭で、読書指導が充実している点も見逃せない。小学校では、教師が毎月、図書館に子どもたちを連れて行き、本を借りる手助けをする。しかも、本を読むだけでなく、本について自分の考えを持つように指導する。それは、読解には、読む力とともに、意見表明の力も期待されているからである。

家庭でも、5時ともなれば家族がそろうので、夕食後はたっぷり時間をかけて親が「本の読み語り」をする。また、図書館を始め、いろいろな場所で本の読み語り展開されている。

PISA2000の調査では、フィンランドの家庭の蔵書数は決して多くない。子どもたちは、公共の図書館をたくさん利用している。しかも、受験のためでなく、好きで読書しているということである。

フィンランド人は本好きで知られている。

「フィンランドは、『図書館利用率世界一』が自慢で、1人当たり年21冊を借りているという。日本では、国民1人当たりの公共図書館貸し出しは年4.1冊である。」²

このように、学校でも家庭でも、読書することが当たり前という環境が、読解力世界一を実現させているといわれている。

おわりに

わが国の今後の課題であるが、全校で「朝読」をさせるとかの単なる読書指導ではない「読解力」の向上を図る必要がある。それには、やはり「総合的な学習の時間」の有効活用が欠かせないと考えられる。授業時間は減るが、考える力をつけるには重要な時間である。国語だけでなく、全教科において、自ら考える力をつけることが必要である。

引用文献

- 1) 「朝日新聞」2004年12月20日
- 2) 「読売新聞」2005年3月23日

参考文献

- 1) 福田誠治『競争やめたら学力世界一』朝日新聞社 (2006)
- 2) 福田誠治『競争しても学力行き止まり』朝日新聞社 (2007)
- 3) 福田誠治『格差をなくせば子どもの学力は伸びる』亜紀書房 (2007)
- 4) 実川真由・実川元子著『受けてみたフィンランドの教育』文芸春秋 (2007)
- 5) 文部科学省『読解力向上に関する指導資料—P I S A調査(読解力)の結果分析と改善の方向』東洋館出版社 (2006)